



森と水の源流館 だより

November, 2010 vol.95

電話) 52-0888 fax) 52-0388 (水曜休館)

残しておきたい川上村の山言葉 其の十一「おん(陰地)」

意味: 北および西向きの土地。杉を植えるのに適した土地が多い。

⇔ひなた(日向)

※川上村の方言の意味や使い方などについてのご意見をお待ちしております。



生物多様性について考えてみましょう



10月11日～29日まで、COP-MOP5(カルタヘナ議定書第5回締約国会議)及びCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)が名古屋で開催されました。今回、193の国と地域の代表が集まりました。生物多様性条約は、加盟国数で世界最大の条約で、それだけ重要な条約であることがわかりますが、残念ながら、アメリカ合衆国は未加盟です。実は、スタッフ木村も少しだけ見に行ってきました。

今回の会議では、遺伝資源(生き物資源)の利用と利益配分を定めた「名古屋議定書」や2010年以降の生態系保全の国際目標「愛知ターゲット」を採択されました。

この生物多様性という考えですが、ちまたには生き物・自然のことだけを話し合う会議と思われる方も多いようですが、実際は私たちの生活に密接に関わる問題がたくさん話し合われました。

私たち人間は、自然の恵み無しに生きてはいけませんし、文化も育んでいけません。また、長年にわたり、人間は自然の中でバランスをとって暮らしてきました。そのため、生き物の中には人に依存して生きながらえてきたものもいます。川上村の暮らしや文化もこの雄大とも言える自然環境に対応して発展してきたものであることはご周知の通りだと思います。文化が廃れば生き残れない生き物も出てくるわけで、議論の中には伝統文化を守ることなどもテーマとなりました。

川上村でも、環境基本条例が制定され、具体的な動きにつながりつつあります。これを契機に、これからも、私たちを含めて生き物たちみんなで生き残っていくためにどのような生活をすればよいか考えていただければと思います。

11月20日は無料で入館できます!

森と水の源流館は「関西文化の日」に参加しています。これは、2003年、当時の河合隼雄文化庁長官が「日本の社会を文化で元気にしよう」「そのために、まず関西から始めましょう」との呼びかけからはじまったものです。

関西一円の文化施設で関西の文化をもっと知っていただくために、11月の一定期間の入館料を無料(原則として常設展)でご利用いただく日を設定したもので、約400施設が参加しています。当館では11月20日を無料入館日として設定しています。この機会にぜひお越し下さい。

まだ間に合うイベント案内

吉野川紀の川しらべ隊 「吉野川の岩石をしらべよう」

●11/27(土) ●10:00~16:00 ●定員20名 ●小学生～ ●参加費:1,500(1,000)円 ●講師 奥田尚さん(檀原考古学研究所共同研究員)

※お申込み・お問い合わせは、森と水の源流館まで

※()内の料金は源流人会会員割引価格

※小学生以下の参加は保護者の参加も必要

10/11 風土記の丘まつり

和歌山市の紀伊風土記の丘で第一回風土記の丘まつりがあり、当館も出展してきました。今後も吉野川・紀の川の上下流交流の一環としてお互い行き来できればと考えています。



コケパウチのしおりづくり



山元学芸員と木村による自然観察

10/17・31 和歌山市民の森づくり

三之公には「和歌山市民の森」と呼ばれる森があります。これは、和歌山市が紀の川源流である森を守り育てていこうとの願いから、村が借りている民有林の一部を「和歌山市民の森」として、平成16年から整備しているものです。



10月17・31日には公募で選ばれた和歌山市民のみなさんによる森づくりの体験会が開かれ、川上村を訪れました。残念ながら、31日は荒天のためあまり作業は出来ませんでした。源流の森の大切さを知っていただくよい機会となりました。

11/5-6 里なび研修会 in 川上村

水源環境や源流域固有の文化を、山村単独で維持していくということは今後ますます難しくなっていくと考えられます。そこで都会の人々や、企業・団体のみなさんに理解を求め、協力と支援を集めながら、いかに進めていけばよいかを考えるシンポジウムを環境省の主催で開催しました。

おとなりの三重県大台町からは、人工林による二酸化炭素の吸収・固定量をクレジット（認定価値）として、企業などに販売、流通することで資金を集める「J-VER」（ジェー・バー）という制度に取り組んだ実践報告が行われ、そのあと川上村を代表し、森と水の源流館から「水源地の森」の保全や、さまざまな自然体験プログラムなどを紹介しました。「源流域には都市の人々が捨ててしまった文化が残り、これを山村だけでは守ることができなくなってきているので、都市や企業の人々にうまく活用していただきながら、いっしょに守っていただきたい」と訴えました。そして最後にパネルディスカッションで、辻谷館長は「企業の協力で、川上の人工林の皆伐を進めるモデル事業を進め、その材はその企業らしい使い方をしていただきたい。そしてその後には、スギ・ヒノキだけでなく、実のなる広葉樹からなる混交林の森づくりをいっしょに進めてほしい」と提案しました。このシンポジウムがきっかけとなって、川上村にいろいろな企業・団体がかわっていただき、水源地域の環境と役割が維持されていくことが望まれます。

翌日は、現地見学会が行われ、「水源地の森」や「芽吹きのかげ」などをみんなで訪ねていただきました。

